

坪田譲治文学賞受賞を記念して中央図書館で2月
末まで岩瀬さんの作品企画展が開催された



「読書で何かを学ばないといけないわけじゃない。頭の中に情景が浮かんだり、何かが湧き起こる体験も本を読む楽しさだから」

読書が好きで、自らも作家として長年執筆活動を行う岩瀬成子さんはそう語ります。

高校を卒業して働き始めた岩瀬さんの通っていた場所の一つに、岩国市内



子供の頃に感じた思いは 誰の心にも生き続ける

にあった反戦喫茶「ほびっと」があります。ほびっとは当時、若者が集ってさまざまな活動をし、語り合う場になっていました。そこで偶然作家の今江祥智さんの児童文学についての講演を聞いたことが、岩瀬さんにとっての転機でした。

講演に感銘を受けた岩瀬さんは、今江さんの教える大学の聴講生となりま

す。そして自分でも短編小説を書き、今江さんに見せたところ「これを原稿用紙300枚くらいの作品にしたら面白くなるよ」と勧められます。そうして書き上げた作品が岩瀬さんのデビュー作「朝はだんだん見えてくる」です。今江さんの尽力もあり26歳の時に出版されました。

を続ける岩瀬さんは、これまでずっと子供であるとはどういうことかを書きながら考えてきたと言います。

「子供っているんなことを考えているんです。子供は1人の複雑な人間であり、人格です」そう考える岩瀬さんは「子供の時に胸の中にあつたいろいろな気持ちは、大人になってもずっとその人の心にある続ける」という思いで作品を作っています。

40年以上にわたり作品を作り続けてきた岩瀬さんですが、これまでに書くことをやめたいと思ったことはありません。「出来上がった作品に満足することはなかなかないですし、何より私は書くことが好きなんです。いつの間にか40年たっていました。」

子供たちにとって、そして大人にとっても、読書が何かを考えるきっかけの一つになればと願う、岩瀬さんは物語を書き続けます。

Vol.142

岩瀬 ^{じょうこ}成子さん
(門前町在住)

児童文学作家で玖珂町出身。1977年のデビュー作で日本児童文学者協会新人賞受賞。著書は50作以上で数々の文学賞を受賞している。2021年「もうひとつの曲がり角」で坪田譲治文学賞受賞。



受賞式後のイベントで直木賞作家の森絵都氏と対談する岩瀬さん



1972年当時、今津町にあった「ほびっと」は岩瀬さんの活動の原点となった

